

美術作品収集方針等の県民説明会の意見概要

地 区	日 時 等	参加者数等
県民説明会(県教育委員会主催) 南部会場	11月23日(水・祝)13:00-14:50 南部町総合福祉センター	10名 会場発言者3名

会場発言者①

- ・アンディ・ウォーホルの作品《ブリロの箱》はどういうものか。
- ・「未来をつくる美術館」という話で、美術館ができたらかっと自分の子どもも見に行くだろうし、学校でも見に行くことを楽しみにしていると思うが、子どもたちに向けてどんな展示、どんなことをするか。

→尾崎美術振興監

- ・アンディ・ウォーホルはアメリカのポップアートと言われる代表的な作家で、1960年代にアメリカで勃興した。この運動は、それまで美術の表現の主題とされることがなかった日常的な品、大量生産され、反復され我々に馴染んだ、非常に卑俗なイメージの一般的な商品が作品にしようとした部分がある。一番有名なのはマリリン・モンローだとか、映画や雑誌で非常に目にするイメージ。いろいろな考え方ができるが、美術というのは時代の一つを表現として象徴するもの。スーパーに行けば物が買え、映画を見ればみなが同じイメージを見る。そういったイメージを作品にしようとして、非常に大きな話題を呼んだ。それまでの美術は、崇高なものや悲劇のものといった美しいものを主題にしたものが多く、マーケットのどこでも売っているものを主題にすることは、当時非常に反発を受けた。初めは受け入れられなかったが、やはり時間が経つにつれて、これは我々時代の象徴ではないかということで、受け入れられてきた。
- ・「こんな高いものは一つでいいんじゃないか」とよく質問を受けるが、大量消費・大量生産ということを示すためには、たくさん並んでいる状況が必要。実際、ウォーホルが展示した当時の写真を見ると、部屋中、壁いっぱい積み重ねてある。残念ながらそれほどたくさん買えなかったが、複数出することは非常に珍しく、良い機会だった。
- ・日本国内には、モンローやキャンベル・スープの平面作品も多くあるが、立体作品はほとんどない。20世紀を代表する作家の一人であるウォーホルの代表作品であり、日本中、また世界から人が来てくれるぐらいの集客力と話題性のある作品。
- ・いろんな鑑賞の仕方があると思う。大人より、むしろ子どもが、美術館に置いてある、ちょっと見はスーパーにある箱、「これがなぜ美術なのか」「なぜスーパーに置いてある箱が作品になるのか」を考えるよいきっかけになる。
- ・人によって絵から受けとれるものは違い、それをお互いに認めるのが美術の対話型鑑賞のメリットの一つ。《ブリロの箱》はその対話型鑑賞に非常に適した題材。
- ・20世紀の美術は、美しいかどうかではなく、新しい価値を作り出すことに意味がある。今では名画名作と言われる印象派やキュビズムも、当時はそれまでとは全く異なった表現で、そこにその新しさや意味を見出すかということの人々は考えた。そういった意味で、これは非常にラジカル、その中でも非常に厳しい、しっかりとした問いかけだと思うが、そういったものを問うものとして、これが一つあるだけで非常に変わってくる。
- ・これ一つだけだとわからないと思うが、例えば、この作品の後ろにマリリンの肖像を置いたりとか、別の作家の作品を並べていくといった展示の中で文脈をつくることで、作品の理解がすごく進むと思う。そういった切り口が幾つもある作品として、子ども向けだけでないと思うが、美術に関することを考える、非常によいきっかけじゃないかと考えている。

会場発言者②

- ・イギリスに20年間いた経験から発言する。費用対効果が言われ、ウォーホル作品も所蔵する価値のあるものだと思うが、鳥取県の小さな財布の中で購入するに相応しいものか。ウォーホルの作品はお金に余裕のある方が収集するものと思うが、こういった大量消費を念頭に置いてどんどん価格が上がっていく。そういった楽しみ方を念頭に置いて作られた作品だと思っている。
- ・作品収集の予算が「5億あるんだったらそれぐらいの金額を使ってもいいんじゃないか」とどこか緩みがあったんじゃないかと私は思うし、鳥取県のコレクションから考えると並びがどうなのかと思う。
- ・県立博物館でのことだが、本来その作品のベストの状態を見せるはずのライトアップが適切な方向にされていないことに学芸員の方が気づいてないと思う。そんな運営の仕方、高額の商品物をどんどん購入されて本当にいいのかとちょっと不安に思うところがある。それも含めてもう1回、足元を見直していただきたい。

→尾崎美術振興監

- ・新しい収集方針は、抜けているところを買うことにより、全体を見せる手法。かなりジェネラルというか、とんがったところのないものなので、ウォーホルを買ったことはちょっと唐突にも思われるかもしれないが、今後買う作品を見ていただければ、ある程度ウォーホルを買う必然性をわかっていたらと思う。
- ・金額について高い安いというのは非常に相対的な問題になると思うが、今回のウォーホルについては、厳密にその価格についても調べた上で購入を決めた。むしろ相対的に安いものだと思う。
- ・費用対効果は、その美術館の理念とどの程度あうかとは、またちょっと別の問題だと思う。今回、知事の美術品取得基金を当面凍結するという発言もあったが、そこはきちんとみながら買っていきたいと思っている。
- ・作品の照明の仕方について、どの展示を見られてそう思われたかわからないが、我々の学芸員にはベテランも多くなる。開館してからきちんとしていきたい。

→梅田美術館整備局長

- ・費用対効果という言葉自体、公共事業など公が行う事業でよく言われる話だが、こういう視点は美術作品についてもいえる部分もあると思う。ただ、美術の相場感や投機筋の動きなど変動も激しく、正確にはつかみにくい部分がある。ウォーホルの3億円は全国でもテレビで多く取り上げてもらい、3億円を超えた広告効果は起きているといった計算もある。
- ・ウォーホルが今の時代でも社会にもたらす衝撃は、作品の価値としては本当に大きなものがある。そういう意味では、3億円の買い物はそれ以上の効果を鳥取県に今もたらしていると現時点でも言えると思う。開館後、多くの人に実際見て感じてもらえる時が来るが、お見せしてない今の段階でも、これだけの話題を起している作品としての意義は大きい。
- ・歴史を見ると、ウォーホルはどうしてもリッチな方、セレブの方の趣味といった場面もあったが、今振り返ると、美術史の中で起きた一つの現象。私が素人なりに解釈をすると、美術史っていうのは大昔の作品からずっと続いてきて、戦後大きな変革を経て今に至っている、というふうに捉えている。今の作家の芸術を理解するためには、欠けている部分があると理解がなかなか十分に追いつかない。そういう欠けている部分をぜひ見ていただくために、この作品はすごく意味があると思う。
- ・ライティングの話があったが、県立博物館にいる学芸員は全国レベルの高いスキルを持っていると思うが、ご意見のような問題点というのがあるかもしれない。そこは、今も含めて今後も大いに意見していただきたい。
- ・説明会の中では本当にウォーホルに詳しい方がおられ、本当にお好きな方というか詳しい方に言わせると今の扱いが十分でない部分もある。こういった声を大いに寄せていただきたい。

→赤井主任学芸員

- ・そういう場合は学芸員が対応するので、受付でおっしゃってほしい。

会場発言者②

- ・ライトがずれていると話したら専門家がやったとの返事で、専門家がそのようにして気にならない方が大勢いるなら、そこまではする必要もないのかもしれない。ウォーホルの件もそうだが、気にならない方がたくさんいて、気になる方が少数なら、もう仕方がないと思う。

→赤井主任学芸員

- ・県立博物館のハード面での限界があり、絵画用のライトを使って正しい位置からライトを当てることができない場合もある。ただ、できる限り展示効果をいっしょに出して作品をいい状態で見てもらいたいと、学芸員一同、同じ気持ちで取り組んでいる。お気づきのことがあれば、ぜひおっしゃっていただくと大変ありがたい。

→梅田美術館整備局長

- ・県立博物館は今年開館 50 年の古い施設・設備で、今の学芸員の持てる能力をフルに発揮してない部分があると思う。新しい県立美術館では、設備面は最新のかたちで最新の機器を入れることができる。そこで、学芸員の能力をいかに発揮して素晴らしい見せ方を実現したいと思うし、ご意見をいただきながら改善に努めてまいります。

会場発言者③

- ・《ブリロの箱》の方がこれだけ騒がれているのに、経過的には間違った動きはしてないと言われるが、学芸員の得意分野の趣味趣向に走る部分が絶対あると思う。教育委員会の会議では、オリジナルは一つであとはプロダクト、ジェネリックみたいなものを5個買うことに、素人的なご意見として「それおかしいんじゃないの」というやりとりは全く無かったのか。
- ・有識者の意見を聞き、評価価格を決めるのも確かにあるが、結局それもつながりある世界で決められた金額であり、正直正しいのか。その辺りも踏まえて、教育委員会の中でそういう意見が出たのか、公開できるような議事録があるか聞きたい。

→尾崎美術振興監

- ・購入に関する流れを説明すると、今回学芸員が選んできたが、決して学芸員の趣味ではなく、収集方針に照らし、開館も近いこれはいいものがあるということで選んだ。それを収集評価委員会にかけると教育委員会の中で上まで伝える。同様に知事まで話が上がる。そこでは、収集評価委員会にかけてもいいと基本的に言ってもらえるが、これは、学芸員の専門性をある程度尊重しているからで、収集評価委員会にかけるとのことについての可否はほとんど問われることはない。
- ・そこから収集に足るかどうかは収集評価委員会にかける。この収集評価委員会は外部の有識者7名程度で構成されており、当館のこれまでの収集方針や収集している作品も非常に詳しい見識のある方々。そこで、実勢価格に詳しい方の評価をきちんと複数の方に必ず聞いていただく。それからオークションレコードでこの《ブリロの箱》が最近は何れぐらいで売れているか、ほかの美術館が同じような作品を買ったら幾れぐらいで買ったかということすべて一連の書類として提出する。収集評価委員会では作品の購入について否定されることも実際にある。「この作品は鳥取県立博物館にふさわしくないから購入すべきではない」あるいは「この程度まで値段を安くするのだったら買っていいが、それができないのなら買わない」ということは、これまでしばしばある。そういった意味で、最終的に購入の可否、作品の適否を決めるのは、収集評価委員会と理解していただければいい。
- ・非常に公正に厳しく評価をしていただき、私自身もいくつかの県で同様の委員を務めているが、中でも鳥取県のレベルは非常に厳しい。そういった経過を経て収集に至っており、そこを理解していただきたい。そこを担保として、作品の購入を決めているということをご理解いただきたい。

→梅田美術館整備局長

- ・教育委員に限らず県庁の中で、俗な言い方をすると、「もうちょっと一般受けするとか、わかりやすい作品の方がいいのにな」という声が正直あった。そういう誰もが知っている作品は、桁が違い、5億で買えるような代物ではない。とてもじゃないが鳥取県が手が出せるようなものではないものが多く、そんな中で、この《ブリロの箱》というのは実は非常に掘り出しものである。
- ・とはいえ、これを3億円で買えるというのは、県民の方は衝撃をもって受けとめられると思う。本来は、収集方針といういわゆる全体的な設計図の中で「前衛精神を示す作品」というのも必要だから、そこに当てはまる作品として買わしていただいたという論理的な説明の仕方をすべきところ、説明の仕方としてまずかったことは非常に深く反省し、9月県議会では教育長が議場で陳謝し、遅まきながら説明会を始めさせていただいている。
- ・収集についても、決して学芸員の趣味趣向ではなくて、客観的な委員会を経て進められたということを理解していただけるよう今後も説明を尽くしていきたい。

→尾崎美術振興監

- ・議事録に近いものはあるが、非常に機微に入るもので、つまり個人情報が多すぎる。また例えば、「これは贋作ではないか」という指摘など、公表した場合、相手方に大きな損害を与える可能性さえあり、結果的に委員の自由で率直な発言を阻害することになる、非常に公表しにくい文章だということをご理解いただきたい。

→梅田美術館整備局長

- ・平井知事の定例記者会見で財布のひもを締めるという話があったが、予めこういうものを買うという説明がしにくい美術品取得基金について、県民に分かっていただける方法の改善ができないかという知事の投げかけだと受け止めている。しばらくは財布が締め、新たなものを早々に買うことができないが、再開するときには県民の方に分かっていただけるよう制度の改善に努めていきたい。

会場発言者③

- ・「これを見つけた、これを買う」じゃなく、例えば、タイの大使公邸にある前田寛治の《海》のような、こういう機会じゃないと入れることができないようなものに早く手をつけられるのではないかと。ウオーホルの《ブリロの箱》を4個ぐらいいやめておけば、タイの大使館に購入の話ができるのでは。
- ・藩絵師の屏風とかもこういう機会に購入された方がいいのでは。日本の住宅で置く人はいないので、海外に出てしまう。こういうものこそ留めておくべきではないか。

→尾崎美術振興監

- ・最近、タイの大使公邸に《海》を見に行き大使とお話した。開館記念展の出品の可否まではいっていないが、考えている。
- ・今ここで収集作品の情報を示すことはできないが、おっしゃった作品も含めて、例えば寄託を受けている作品を購入できないか、そういったことを含めて常に考えて動いている。

- ・今回、ウォーホルの作品だけが話題になったが、鳥取県の美術館として適切な収集は常に考えながら、今後も収集していこうと思っている。今のお言葉を胸に留めて今後も収集していきたい。

会場発言者②

- ・先ほど申し上げた費用対効果というのは、確かに効率の話だが、ウォーホルを購入した別の県の公立美術館がかなり赤字になって困ったという話を耳にした。費用対効果は宣伝効果のことではなく、県外からの集客、美術館を運用していく上で赤字にならない費用対効果があるのか。海外から日本に旅行するとき立ち寄りと思う「魅力のある美術館」になるのか。今後も毎年5億円がでるのなら、そういった観点からの費用対効果、美術館として成り立つ経済効果が波及できるようなものになるか。
- ・鳥取県とゆかりある品々を集めるにしても、本当に看板になるような、50年先に「あそこの美術館のあれはすごいよね」と思わせるようなものができたら良い。
- ・このたびのウォーホル作品の購入は、美術館の宣伝効果の意味で取り上げられたというより、マイナス要因的な取り上げられた方をされたと思う。そのマイナスから回復するために魅力的に持って行ってほしい。

→梅田美術館整備局長

- ・費用対効果について広告効果だけを申し上げたが、広告効果に加えて経済効果はどうなのかは、当然その先にある話。まだ開館してないので、その後集客としてどれぐらい期待ができるのかということ。この集客力は大いに期待しているところだが、「その作品があるから見に行きたい」ということが出てくると思うので、そこは冷静に考えていきたい。
- ・県立美術館では年間10万人の集客目標を県議会と相談して考えている。「年間10万人しか来ないのか」との声も多いが、PFI事業の民間事業者の方からは、「自分たちのノウハウを持って、さらに積んで年間18万人を集客したい」という提案もある。とは言え、ペイできないような、継続性の無い収支ではいけないので、そこは今冷静にシミュレーションをしているところ。
- ・インバウンドの話もあったが、海外から鳥取県に足を運ぶよう促さないと、そういった競争の世界に勝っていけない。そこは冷静に作品の性質とか、それから発信して届けるということが第一。知らなかったら来ないので、そういったところも合わせて戦略を練っていきたい。
- ・鳥取県は漫画というコンテンツも大きな魅力の一つ。名探偵コナンは海外でたくさん翻訳されており、それを目当てに北栄町の青山剛昌ふるさと館には多くの方が来る。県立美術館を漫画の館にするわけではないが、この美術館でも何かそういった情報に触れることができるというような味つけを、ぜひ考えたい。
- ・マイナス要因の話については、確かにネガティブなご意見も3000件を超えるコメントの中に全国から多くあり、厳しい見方をされている一方で、応援してくれる声もある。プラスの面をしっかり伸ばしていきたい。

→尾崎美術振興監

- ・新しくつくる美術館の一番大きな魅力は、ウォーホルの作品があることではなく、広い常設展示があること。県立博物館は非常にせまく展示室が一つしかなく、例えば前田寛治あるいは辻晋堂の生涯にわたる作品をほぼ網羅的に収集しているにも関わらず、見せることができなかった。
- ・今度は前田室とか辻室とまでは言わないが、洋画の部屋や彫刻の部屋で、前田寛治とか辻晋堂の生涯に渡る名作を一堂に並べることができる。比較的地味な作家だが非常に優れた作家であり、それを見にたくさんの方が来られることは間違いない。そういったところで新しい美術館に期待をかけている。

会場発言者③

- ・作家さんに美術館として特別に何か作ってもらったりはしないか。

→尾崎美術振興監

- ・美術館のためのコミッションワークということ、特に野外に関して考えていく必要があると思う。誰に頼むか、どういうものをお願いするかは別に、この美術館のためにつくっていただいて、この美術館に来ないと見えない作品というのは、今後考えていきたい。

→梅田美術館整備局長

- ・岩美や米子の会場で、「次世代を担う子どもたちと意見交換をしたことがあるのか」という意見や、「若者がこういった会に少ないのは何でか」という質問があるが、我々も本当に子どもたちや若者の声は聞きたいと思っている。意見でも感想でもいいので、何か頂ければありがたい。

会場発言者④

- ・「子どもたちに見せて考えさせる」という発言があったが、子どもは「考えさせられる」とどうしてもそういう美術学的な視点で作品を見てしまう。やっぱり「感じる」ものだと思う。別に「きれい」という感想でなくてもいいし、

「衝撃的」とか何でもいい。「考えさせる」という持って行き方はどうかと思う。イギリスでは、スクールツアーで美術館の好きなところで模写したり、作品を見たりする。「考えさせる」という上から目線ではなく、好きなようにさせる中で「考える」ってことだと思う。基本的には「感じる」ということ、感受性を大事にしていきたいと思う。

- ・イギリスでの教育を提言したが、鳥取県は若い人間の意見を聞く土壌が無いのではと思う。その機会というのは、どこかに足を運んでいかないと難しい。

→梅田美術館整備局長

- ・意見というのはこちらから出向いていかないと、得られないというのはそのとおり。どうしたら若者に気軽に発言してもらえるのか、手を挙げてもらえるのかを日々考えている。どうしたら下から目線も上から目線もなくフラットな関係で、広くいろんな方に発言してもらえるか考えている。「こんな話をしたい」といってもらえれば、昼でも夜でも、どこにでも行かせていただく。
- ・若い方々には、なかなか雰囲気的に手を挙げづらいということがあるかもしれないので、SNS などいろんな手段を設けている。ぜひ今日の感想でも入れていただければありがたい。1 人でも多くの方の意見を聞くという機会、今後も続けていきたい。

→赤井主任学芸員

- ・子どもたちに向けて「感じる」という話があったので少し補足すると、美術館に設けるアート・ラーニング・ラボ「A.L.L.」は子どもだけに向けたものではなく、子どもから大人まで「アートを通じた学び」を支援する。鑑賞だけでなくワークショップとか、どういうふうに美術を親しんでいけるのかシンクタンクのようなことを考えている。
- ・つまり、実際に実験的なプログラムをしてみて良かったところはさらに発展させ、悪かったところは改善し、また次のプログラムに活かすサイクルをつくるような研究所みたいなことをしていきたい。小学校や中学校の美術教育の現場の先生たちと一緒にプログラムを開発したり、研究会の下準備を日々重ねているところ。本日の意見も共有して、活かせるかたちはどういうものがあるかをこの A.L.L.というところでやっていきたい。
- ・先日、倉吉市の美術館建設地から 600 メートルぐらいの場所に、開館までにいろいろ活動する拠点として、HATSUGA(はつが)スタジオというサテライトスタジオを開設した。普及プログラムやこういうちょっと話す場、美術館や或いは作品やアートについて話すような場所、或いはワークショップとかアートに親しむようなプログラムを展開するような場所を開設した。先日、オープニングセレモニーとトークをしたところで、今後、継続的に活動していきたい。そこに学芸員も出ていくし美術館行政に関わる職員なども出向いていって皆さんのお話を聞いたり、話し合ったりするような場を作っていきたいと思う。ぜひそちらのニュースもチェックして、足を運んでいただければありがたい。